身辺所感

音楽鐘のこと

毬子の予後

——女子中等少年院から——

大平エツ（二三回生）

昨年文化の日に、愛光女子学園に音楽鐘（チャイムベル）が寄贈されました。贈り主は参議院議員宮城タマヨ女史で、母の鐘と命名されました。講堂の屋根の小さい塔から、美しいウェストミンスター・メロディーを奏でるその音色は、母校日本女子大学のチャイムベルと同じで、学園に教官として働く七名の桜楓会員は「目白の鐘と同じ音色ねえ」と夕ぐれの空を仰いで感慨を深くする日もあります。

この音楽鐘は近隣一杆あまりの上空に美しい音をただよわせます。朝の鐘、昼の鐘、夜の鐘は、愛光女子学園と地域社会をなごやかにつつむかのように、おおらかに響きわたっています。さわやかな朝空に聞く六時の起床の鐘は、少女たちの心に希望を呼びさまし、ふる里の父母の励ましの声にきく子もいます。田園に暖かい太陽がさんさんと輝く大空から、正午をつげる朗らかな鐘の音に、お百姓さんは鍬をやすめて鐘楼を仰ぎながら、昼あがりの仕度をはじめています。星のきれいな静かな夜空に消燈の鐘が鳴るころ、少女たちは寝床の上に正坐して、つつましやかな感謝の祈りの姿勢で、ウェストミンスター・メロディーに耳をすませながら、お休みなさいをいつて眠りにつきます。幼くして母を失つた少女は、子守歌で寝かされた記憶がないので、毎夜の母の鐘は、亡き母の子守歌のような気がするといい、霧の深い武蔵野の夜など、遠いイギリスのウェストミンスター寺院の鐘を偲んで感傷的な詩を作る子もいます。

この音楽鐘母の鐘は、少女たちの明け暮れに親しみ深い存在となつて、学園の内外に新しい喜びの雰囲気をつくりだしています。これと同じ鐘が同じ日に宮城女史によつて男子の多摩少年院、東京医療少年院及び関東医療少年院にも贈られました。

宮城女史の近著「問題の子らと四十年」という本の出版記念として、著者は先づ最初に在京の四少年院に母の鐘を贈ることを考えられました。それは不遇な生立の多くの少年、少女に慈愛の母心をこめてその更生を祈念される意図にほかなりません。環境不良のため

に幼いころから歪められた子どもの心情の矯正は、少年期から青年期、更に成人して後までの長期にわたる理解ある保護や適切な援助や助言指導が必要であることを、「問題の子らと四十年」によつて学び、著者の貴重な体験を通して綴られた人間愛の生きた物語に強く心を打たれました。

私も微力をかえりみず非行少年の矯正と保護に二十年余を過し、愛光女子学園の創業から今年は九年目になりました。十周年を来年にひかえて、どうかよき実りの成果をみたいものと念じている折から、「問題の子らと四十年」をよみ、贈られた音楽鐘に深い意義を学びながら、貴い使命の道に精進したいと思つています。

少年院に在院する少年少女は、それぞれに深い問題点をもつもので、その環境や性格も複雑で、矯正教育の理想は高く現実は予想以上に困難が伴うのであります。少年院の矯正教育は、在院者の社会不適正を除去するため、本人の自覚に訴えて、規律ある日課にもとづいて、学科教育、職業補導、及び生活指導を授け、心身に故障あるものには医療を施してゆきます。その処遇には細心の計画をもつて慈愛を旨とすることは勿論、医学、心理学、教育学及び社会学などの知識を活用して在院者に接し、四六時中矯正教育に明け矯正教育に暮れています。嬉しいことに、処遇の段階が進むにしたがつて、心身の健全性を次第にとりもどし、入院当初と仮退院のころには、見ちがえるように改善、向上の姿が見られるようにもなります。しかし本人の性格の矯正や環境の調整は相当長い期間を要するものであることを、私たちは数多くの事例から知るのであります。

このあいだ久しぶりに退院生の森毬子さんが訪ねてきました。昭和三十年十月に仮退院をした子で、この正月に成人に達したと語る毬子は、見ちがえるように娘らしく美しくなつたことに驚きました。脊丈も伸びたし、ブードル・カットの髪型がよく似合い、お化粧までしてグレーの毛のツーピースが上品にうつり、身だしなみからみて今の生活が安定しているように直感されました。昔のひねくれた印象や男の子のような無頓着さは全く見られなくなつて、私の部屋に入つてからも挨拶を普通にするし、面接にも硬ばらないでなつかしそうに自然の句調で話しました。私は暖かいストーブを囲んで、ゆつくり近況を話してもらいました。

現在ある和洋菓子店に店員として住込で月四千円貰つているとのこと。そこには昨年の十二月初旬に安定所から紹介されたもので、余り時がたつていないが、その家は若い主人夫婦と職人が四人で、みんなよい人達でお店は繁盛して忙しいらしい、雇主は毬子の身上について何も詳しく聞かないから自分の方でも事情は語つてないので気になるが、よく面倒をみてくれるので、一生懸命に働いて長くこの店で勤めるようにしたいと明るい表情で話していました。しばらくすると一寸面を曇らせてただ一つ心配なことは、今の店に勤めると間もなく実母は使のものをよこして小遣銭の無心をするとのことでした。多分そのうちに母自身が現われて雇主に会つた場合、これまでもそうであつたように、何も知らない他人の雇主に毬子の過去をあけすけに悪口するにちがいない。その時は今のお店にもいられなくなるのではないかと思う——というのでした。

彼女の話から、私は毬子がとうとう実母にめぐり会つたことを知つて、そつとその表情を注意してみたが、その面には喜びの片影さえも認められませんでした。毬子のただ一つの生きる望みは、生母にめぐり会うことでした。顔も知らない実母への思慕と憧れで毬子

の幼年期から少年期の全生活が占められてきたような子でした。長い間の放浪生活も母を求める心の不安定からでした。毬子は恵まれた養家にも祖母の許にも落ちつくことができませんでした。十四才ころから家出が激しくなり、浜松、静岡、横浜、川崎や東京と放浪の生活をつづけ、時に生きる希望を失つては自殺を企て未遂で警察や児童相談所の保護をうけたことは度々でした。その都度養父母や親戚に引取られても、なかなか家庭に安定することができない子でした。「とうとうあなたお母さんを探しあてて嬉しかつたでしようねえ……」とその顔をのぞいてみました。「ええ会つたときはとても嬉しかつたし、母も喜んで養父と二人暮しの家においてもらつて私はお勤めに通いました。義父は自動車の運転手でやさしい人でしたが、昨年の秋に勤めている会社がつぶれて失業してからは暮しに困り、母は私の収入をあてにして、堅気の商店のお勤めでなく、お金のとれる酒場に働くよう強いるのです。その上私が養家から持つてきた衣類や働いて作つた身廻り品をすつかり質に入れてしまいました。それだけでなく、養家に幸福に暮している兄をそそのかして家出させ、兄も多分母が恋しかつたからでしようが、ずつと今も母の家から働きに出て六千円余の収入を全部家に入れさせられるので、このごろは自分の軽挙を後悔しています。兄もそのうち母の許を出て下宿し、独立の道をたてる決心をしたようです。

私もこれまで随分自分勝手のことをして養家や親戚や社会にまで迷惑をかけてきたことが悪かつたことに気がつきました。実母があのような人であるとわかれば、私は長い間苦しんだり親切にしてくれた養父母や親戚の人たちに反抗してまで母を探すのではなかつたと後悔しています。今になつて考えれば、父の兄弟や親戚中で父と母の正式な結婚を許さなかつた意味がわかり、私が二才のとき母が無理に離縁されたわけがわかりました。今では母に何の未練もありません。それより私たち兄妹の幸福の邪魔をしないでもらいたいのです」——と苦々しそうに語るのでした。

毬子の生母は昔水商売の女であつた理由から、父方では堅気の兄弟や親戚が挙つてその結婚に反対したのだそうです。毬子には同腹の姉と兄が一人づつありました。毬子は父が満洲で憲兵をしている時に生れて母に生別後継母に育てられ、姉と兄は性質が温和で何の問題もなかつたのに、毬子は継母に親しまないで父が出勤中、よく地下室の暗い部屋に閉じこめられて食事も与えられなかつた記憶があるといいます。父の印象はとてもやさしくて可愛がられたので、今もつて満洲に残つたまま生死不明の父を案じています。

毬子たちが満洲から引揚げた時は彼女が五才で兄姉妹三人は祖母の許に引取られ継母は実家に帰りました。長ずるに及んで毬子は自分の姓だけが森で姉と兄は後藤であることが不思議でしたが、そのうち、自分が母の胎内にいる時から伯母夫婦の養子に約束されていたことを祖母から語り聞かされて、何か納得できない気持ちにかられました。毬子の父の姉は結婚後子供がないので、弟に頼んで三人目の子供ができたときはぜひ自分達の養子に貰いたいと約束をし、生れた女の子を毬子と命名して養女に入籍したとのことでした。養父は製陶会社の社長で使用人も多く、曾ては市会議員に選ばれたこともあり信望の厚い人物で、毬子がその養家で順調に成長していたら、幸福なお嬢さんになれる境遇でした。

祖母の許でも毬子は我儘で意地つ張りで可愛がられず、小学校では「親なし子」と苛められて口惜しいことばかりでした。毬子の家

出や行状の悪事が目立つようになると、養父母も愛そうをつかして、毬子との養子縁組を解消する意志を本人にもらしてしまいました。しかしその結果は養家に対する反抗心は益々つのり行状は悪くなるばかりでした。

毬子が虞犯で家庭裁判所の保護処分をうけて初等少年院送致の決定を受けたのは昭和二十八年十月のことで当時十五才でした。初等少年院で約一カ年矯正教育を授けられたが、その間度々の逃走事故やその他紀律違反の行動が多く、本人の性格と行状の点で処遇上初等少年院には不適当であるとの理由から、翌年九月に収容分類を変更して、中等少年院の愛光女子学園に移送されてきました。それ以来本学園で矯正教育を授けるうち、一カ年後には社会不適性もぐつと除去され、教科、職業補導、生活指導の上にも進歩向上が認められて成績良好により、昭和三十年十月に仮退院が許可されて保護観察に付されました。

試みに本人の鑑別資料をみると、精神状況では知能指数一一二（田中B式）、性格はひねくれが強く、負けず嫌いで要求が強い、情緒の変化が多い、その他躁鬱性々格の諸特徴が多く精神病質の疑いがある。クレップリン検査はP（H）、激しい下降曲線で病的である、而も休前は激しい情緒障害がある、本少年が時々自殺を意図することもうなづかれるような曲線を示しています。

資質及び環境については前にも記したように、満洲で生れ実母とは二才ころに生別し、継母にひどく冷遇されたことがあり、内地に引揚て後も祖母からも養父母からも可愛がられない存在で、小学校では仲間から「親なし子」といわれて口惜しい印象が濃く残つている、小、中学校とも成績は中以下であつた。

毬子の要求水準は、常に自分を高いところにおくため、フラストレーションの状態が多く、それがコンプレックスを形成して、しかもそのはけ口が適応した代償行為とならないことが多く、その性格を歪曲させてきたものであります。性格の歪曲が猜疑心を強めて、毬子は常に周囲のものから嫌われ手を焼かせていたのであります。

このような子どもの社会的予後と処遇上の注意としては、彼女が何よりも愛情に飢えていることに注意し、慈愛をもつて臨み決して圧迫してはいけない、無理をいつたときは、静によく話しあうようにして心のひねくれを正すことが必要で、指導者は本人から信頼され、安心感を抱かせるように、本人とのラポートに成功することが大切であります。

毬子は本学園では一回の逃走事故も起さなかつた、然し劣等感や性格的に抑圧をうけ易いことに対して逃避しようとして逃走を企てるおそれは時に見うけられたのでよく注意してきました。内向性同志のS関係（姉的）の経験は初等少年院時代に経験してきたが、本学園ではあまり親しい友達はできず、孤独になり易い子でした。

日課では数学（計算）、裁縫、手芸は好きで、体操とフォークダンスは大嫌いでした。前少年院で孔版の経験が五カ月あり、刺繍、レース編、和裁に関心があつたので、本学園では職業補導種目を筆耕部に選び、余暇のクラブ活動で編物その他手芸を楽しんでいました。

毬子の一カ年の在園期間中を通じ、その処遇には非常に困難を経験したケースで、日常生活に情意の面で波が多く、自傷行為、怠休、反抗等がその度ごとに強く現われるが、その他の場合には真面目で、筆耕部でも熱心に仕事をして技術も良好でした。処遇の段階が一級の上になつてからは、自治委員、週番、部屋長をつとめるようにもなりました。そのころから養家や姉や親戚などへの反抗心も少しづつ緩和され、仮退院後の帰任地は養父母の許を納得するまでになりました。

昭和三十年十月〇日無事に仮退院をして出迎えの養母に伴なわれ

久久に養家に帰宅したが、数日もただぬ日の夜十時過ぎているのに毬子から電話がかかつてきました。家出をして今東京駅についたから迎えにきてほしいというので、自動車で教官を迎えにやりました。翌日になつていろいろ話しをしてみたが、再び養家には帰らないといい張つています。やむなく東京の姉夫婦と親戚をよんで相談し、養家にも本人の意志を伝えて東京で就職口を探したところ、ある開業医の女医さんの家に住込み女中で薬局の手伝いをしたり、勉強の時間も与えられることになりました。本人は大喜びでよく働き傍ら看護婦試験を受ける決意をして準備に着手しました。以前にも医師の家庭に預けられて看護婦になる目的で勉強したことがあつたとかで、なかなか真剣に勉強をはじめ、そのころは一週に一、二度は必ず学園にきて先生方に、甘えたり勉強を教つたりしていました。負けず嫌いの頑張り家の性格はこうした面では役に立つたようです。三カ月目ごろに受験をしたが筆記試験はともかくとして面接のとき指の間にうすく残つた入墨のことがわかつて追求されたことから、すつかり自信を失つてしまいました。それからまた放浪の生活がはじまり、一時勉強の間まぎれていた生母への思慕の情が再燃してきたようで、母を求めて心あたりの土地を転々して歩くうち、横浜で遂に長い憧れの実母にめぐりあうことができました。実母と義父の許での一年足らずの生活で、毬子の憧れの夢は破れてしまいました。子供の幸福を願わない現実の母の姿に幻滅の非哀を感じながら、毬子も遂に成人の年令に達してきました。彼女の年令が自分の責任を自覚させ、自ら生きぬく努力ができるようになつたのでしようか？　あるいは情緒未分化の状態が分化しはじめたのでしようか？　何はともあれ、毬子の場合幼年期から少年期を通じてあまりにもいたましい生立を経てきたのちに、ようやく成人の年令に達したことを知つて私は心から彼女のために祝福しました。これまでにも、学園を巣立つた娘たちが、二十才を一つ二つ過ぎると、つぎつぎと幸福な結婚に安定し、母になつていることに思いあわせ、「やつぱり先生年令ですねえ」と自覚したような口のきき方をする多くの学園の卒業生の前例にかんがみて、成人式をおえた毬子の上にも、幸福な運命がおとずれるように祈らずにはいられませんでした。私と毬子との話題が終ろうとするころ、毬子は久しぶりに来訪した大切な相談の要件をいい出しそびれていたことに気づきました。それは兄を通じて兄と同じ勤め先にいる二十五才の青年から結婚の申しこみをうけたことでした。特別に恥しそうにもしないで自然に話しだした毬子の成長した娘心が美しく純情に感じられて、めつきり娘らしく美しくなつたその容姿を、私はぼのぼのとした心でみなおしました。相手は真面目な青年で母親との二人暮しで、将来魚屋さを開店する人でした。

毬子の乙女心のうちに、人生のよろこびがはじめて芽生えたよでした。と同時に過去の辿つた傷の痛みに悩んでいる彼女を目のあたりに発見して、私自身までふと困惑の心がわきました。彼女は過去の行状や、入墨のことや、子どもの幸福を邪魔しようとする実母の存在が何より気にかかるようでした。そしで彼女自身自分の前途に起るであろうさまざまの障害を自覚をしているようで、いじらしくなりました。しかし毬子は何もかも私に打ちあけて安心したようにみうけられました。少しの暗さもなく、あせりもなく、なるようになるであろう人生の大きな試練に直面して、素直になろうする自覚の力がわきつつあるように思われました。

私たちは彼女が在院中にもよく話したことのある心のふる里ということばをふと思い浮べました。夕の母の鐘は毬子のやさしく悲しくしかし自覚のできかけたその心をいたわるように静かに静かに武蔵野の大空に消えてゆきました。

（愛光女子学園園長）